

○日時 2022 年 7 月 22 日 15:00～17:00

○場所 須坂市生涯学習センター 3 階ホール

○出席者

【審議会委員】

勝山幸則会長、荒井英治郎副会長、丸山貴子委員、新野健委員、牧富士男委員
奥原利広委員、古平幸正委員、戸松清一郎委員、島田浩幸委員、佐藤富美子委員
西原秀明委員、中沢裕子委員、宮川浩委員、北森ちか委員、清水貴夫委員

【事務局】

小林教育長、清水教育次長、中村学校教育課長、安川係長、後藤主任指導主事
北村指導主事、松木指導主事

1 開 会

2 あいさつ

会長：

●第 1 回審議会は、須坂市の新たな教育モデル（具体的な学びの形）について教育委員会から提案があり、委員の皆さんに確認と意見をいただいた。

●新たな教育モデルを実現していく中で、少子化という問題は避けては通れない大きな課題。学級数の減少、1 クラス当たり児童数の減、教員配当数の減等。

●今後の審議に当たり、未来の子供たちの教育を作るために、子どもたちにとってどうかという視点で意見ををお願いしたい。

3 議 事

（1）第 1 回審議会の意見等

学校教育課長：

●前回の審議会で委員から様々な意見が出た。本日はそれらの意見をもとに、大切な 3 つの視点について、さらにグループ討議で議論を深めたい。

（2）グループに分かれて意見交換

意見交換のテーマ① 多様性を受け入れる支援のあり方

A グループ：

●学校における多様性多様性とは何か。学校教育で考慮すべき多様性の中身を吟味する必要がある。

●様々な人の多様性も理解が必要。多様性を受け入れるのか包み込むのか。受容か包含か、共通理解が必要。

●多様性を包み込むには、学校だけでなく保護者や地域の共通した見方の醸成が必要。

●困っている子どもへの支援は、支援学校のセンター化も取り入れる。

B グループ：

- 地域の人材を生かすことが大切。企業への要請も含めて、学校と企業の双方の学びにつながる。
- 地域や学校が変わると、職場体験などの学習の方法や考え方も変わってしまうので、お互いで共有することが大切。
- 多くの子ども同士の交流を促進するために、他のクラスの子ども同士での授業も大切。
- 私立の幼稚園にも地元の小学校との交流の機会が欲しい。

C グループ：

- 自分の居場所や活動場所の選択等、様々な選択や解決方法を見出すことができるようにする。複数の場所をキャンパスにする。学校を固定しない。
- 多様性を受け入れ、他者（異なるもの）に触れ、学ぶ良さを体感する場が大切。

意見交換のテーマ② 学校と地域の関係

A グループ：

- 地域も学校に関わりたい、学校も地域が学校に関わって欲しいという気持ちがある。
- コロナ禍で学校と地域の関わりが途切れてしまったことのダメージは大きい。
- 子どもは思いのほか、地域の良さを知らない。積極的に地域と関わる必要がある。

B グループ：

- 学校と地域が交流する機会を作って欲しい。地域の大人を知る工夫が大切であり、学校と地域は、互いに情報発信をして共有することが大切。
- やってほしいこと、できることをPRする機会の設定をして欲しい。地域や企業は、教える体験をすることで、自分の仕事を見つめ直す機会となる。
- 子どもと地域の関わりが少ない。地域の行事は、子どもより大人の方が多く、子どもが関わり方を知らない。このような子どもが大人になっても、ボランティアで何をして良いのか分からない。
- 小さい頃からボランティアの気持ちを育てないと、地区の役員のなり手がない。

C グループ：

- 地域の中に子どもの学びの環境をつくる。学校は大人にとっての学校でもある。
- 子どもたちが地域の良さを知り、誇りがもてる活動や学びを進める。
- 神楽等須坂の文化に触れ、継承していくことも大切。

意見交換のテーマ③ 小規模校におけるメリット・デメリット

A グループ：

(メリット)

- 丁寧に子どもを見ることができる。

(デメリット)

- 適正な人数、規模は、子どもの成長によっても違う。一律に線引きをしてしまうことに疑問を感じる。
- 子どもたちの考え方や人間関係が固定的になる。

- 集団が小さくなり過ぎると、活動が縮小してしまう。
- 小規模校では、小学校の教科担任制の導入が難しい。中学校でも複数免許所持の先生が必要であったり指導時数に差が出たりして、教員配置が難しい。

B グループ：

(メリット)

- 小さくても学校があることが、地域の核になる。
- 同一学年が小さい集団であるので、上下のつながりが密になる。

(デメリット)

- 社会性の育成、部活の選択肢の制限、人間関係の少なさが課題。
- 小さな集団の場合、人間関係が崩れたときに、逃げ場がない。
- 小規模では競争の機会が少ない。

C グループ：

(メリット)

- 一人ひとりに目が届きやすく、その子に応じた学び、支援を提供できる。
- 一人ひとりの役割が多いため、一人が育つ。

(デメリット)

- 大人の手が入り過ぎると、子ども自立を妨げる。
- 多様な学びが少ない。新たな刺激が少ない。多様なものと出会う機会が少ない。
- 地域を離れたとき(高校進学等)、大きな集団での人間関係の構築が難しい。
- 教員一人への負担が大きい。多様な教師と会えない(教員数が少ない)。
- 専門性を持った教師が配置できない。

(3) 市民向けアンケート (案)

学校教育課教育政策係長：

- 須坂市小中学校の適正規模等に関する市民アンケート調査案について説明。

(4) 市民向けアンケートについて意見交換

委員A

- 「12～18 学級を標準としています」という説明書きがあるが、一般の方には分かりづらいので、「小学校では1 学年当たり 2 から 3 学級」「中学校は1 学年当たり、4 から 6 学級」と記載した方が分かりやすい。
- 標準規模の割合の標記も、分数表記ではなく、「11 校中 7 校」の方がよい。

委員B

- アンケートの回答方法を、「該当番号に丸を付ける」と「番号を記入する」が混在しているため統一する。
- 理由を尋ねる質問で、問 14 の選択肢は「・・・であるから」となっているが、問 6、8 では「・・・から」とは表記していないので、統一する。
- 問 7 は、小中学校で定員が異なるため、小学校と中学校で分けて質問した方がよい。

- 問 11 「①生きて働く知識及び技能」をもう少し分かりやすく表現した方がよい。

委員 C

- 問 5 と問 6 は「学級数について」、問 7 と問 8 は「1 学級当たりの児童生徒数について」と項目立てをして分けて表記した方がよい。
- 問 5、選択肢①「1 学年あたり 1 学級がよい」は、小規模の学校をイメージした場合は分かるが、現在 3 学級ある学年をイメージした場合、この問 5 が何を聞いているのか分からなくなる方もいる。
- 問 5 と問 7 はリンクしている。1 学級当たりの児童生徒数が何人必要であるかによって、学級数が決まってくるので、そこを聞いた方がよい。単に、1 学年あたりの学級が多いとかではなく、1 学級あたり何人で学んでいくことがよいかということで、必然的に複数学級になるか単級になるか決まってくる。問 5 と問 7 を一緒にしてもよいのではないかな。

委員 D

- 問 6、8、10、11、12 は、選択肢から 3 つ以内回答するようになっている。小中学校を分けて答える場合、回答欄が 3 つでは足りない。回答欄は 6 つ必要。
- 問 12 の③教員業務支援員の内容が分からなかったなので、説明があるとよい。

委員 E

- 問 4、子どもと同居しているが、社会人のため就学はしていない場合、回答の仕方が分からない。
- 2 ページの「18 歳以上の男性・女性から」は、「18 歳以上の方から」に変更した方がよい。
- 本調査は、審議会が行うため、問い合わせ先は、学校教育課をカッコ書きにする。

委員 F

- 問 8 「⑦一人ひとりが大切にされる」は、もう少し分かりやすい表現に変更した方がよい。⑥と⑦を統一してもよい。

(5) 市内小中学校の視察について

学校教育課教育政策係長：

- 市内小中学校の視察予定について説明。

4 次回内容について

- ・第 3 回審議会 9 月 29 日（木）15～17 時 旧上高井郡役所

5 その他

- (1) 第 1 回シンポジウムの日程変更 11 月 27 日（日）（変更前 11 月 26 日）
- (2) 第 6 回審議会の日程変更 2 月 16 日（木）（変更前 2 月 17 日）

6 閉会